

震災遺児支援、これまでとこれから

八木俊介（あしなが育英会 あしながレインボーハウス チーフディレクター）

民間団体「あしなが育英会」は、全国の親を亡くした高校や大学生の遺児に奨学金を貸与し、進学支援を行っている。1995年の阪神・淡路大震災以降、小学生や中学生の遺児への心のケア活動にも本格的に取り組んできた。

阪神・淡路大震災では0歳から大学生までの約600人が両親もしくは父、母親を亡くした。自らも被災し、身近な場所で親を亡くすといった経験をした子どもも多かった。遺児の中には、赤ちゃんがえりや暗所・閉所不安などを訴える子どもも少なくなかった。そこで、1999年に神戸市東灘区に遺児の心のケア施設、神戸レインボーハウスを開設した。

神戸レインボーハウスでは、遺児の大学生や訓練を受けたボランティア「ファシリテーター」が子どもたちと一緒に遊んだり、おしゃべりやスポーツを通して寄り添うなどして、悲しみやストレスなど子どもたちの感情表出の手助けをした。また、震災遺児同士で震災体験や家族について語り合う機会も作った。子どもたちは学校や地域の友人とは異なる、同じ境遇の仲間と出会い、「一人じゃない」ことを実感し、孤立感を薄めていった。成長した遺児たちはインド洋津波や四川大地震などの募金活動を行い、現地を訪問し、遺児たちと交流した。

阪神・淡路大震災から17年。社会人になったり、結婚して子どもを授かり、父親や母親になった遺児たちも多い。現在も1月17日前後の追悼行事への参加など、神戸レインボーハウスと関わる震災遺児たちは少なくない。



2011年3月11日の東日本大震災でも、多くの遺児が生まれた。あしなが育英会では奨学金の特別貸与に加え、返済不要の生活や進学のための給付金制度（1人に200万円）を設立し、これまでに2千人超が申請した（2012年2月現在）。今後も、東日本大震災遺児に給付金周知の活動と同時進行で生活支援や心のケア活動を行いながら、東北地域にレインボーハウスを開設する準備を続けている。

今回の東日本大震災は、阪神・淡路大震災よりも広範囲に多数の遺児が存在する。被災地である岩手県・宮城県の沿岸部に、地元の方の協力をいただきながらレインボーハウスを複数箇所開設したいと考えている。レインボーハウスではボランティアの養成、宿泊のケア活動に力を入れたい。

遺児の心のケアにはおおまかに、次のポイントがあると考えている。

一つめに、遺児たちの悲しみ方やタイミングは子どもそれぞれ千差万別である。「笑顔だから大丈夫」、「時間が経過したから、癒された」と大人は判断しがちになる。ゆっくりと5年、10年かけて遺児たちの様子を見守る必要がある。二つめは、遺児のケアのためにまず大人たち、特に保護者のケアが重要になる。保護者自身も家族を亡くし、悲しみやショックを抱えながらの子育ての毎日を送っている。子どもたちの面倒を見ている親御さんやご親戚の生活や精神的なサポートが、遺児の支援に不可欠だろう。阪神・淡路大震災の遺児たちが教えてくれたノウハウをいかしていきたい。

今後も、あしなが育英会では東日本大震災遺児の実態や支援ニーズなどを把握しながら、遺児や保護者に必要な支援やケア活動を続けていきたいと考えている。

—プロフィール—

八木俊介（やぎ・としゆき）

1969年生まれ。10歳のとき父親が交通事故死、遺児の奨学金で大学進学。1992年、国士舘大学文学部卒業。1993年、あしなが育英会（東京）入局。1995年、阪神・淡路大震災直後から神戸事務所勤務。1999年、国内初のケア施設となる「神戸レインボーハウス」の開設に携わる。その後、トルコや中国・四川、ハイチなどで発生した大地震で遺児となった子どもたちの心のケアに現地で取り組む。2007年から東京日野市の「あしながレインボーハウス」勤務となり、全国の病氣、自死、災害遺児を対象に「小・中学生遺児のつどい」などでケアの実践を行う。2005年、武庫川女子大学大学院 臨床教育学修士課程修了。著書に『レインボーハウスの子どもたち』（月刊センター出版部、2004年）。